

この時期きまって1年をふりかえり、来し方に思いめぐらしてみ  
るわけだが、年齢とともにそう感じられるのか、たった365日の隔  
たりとはいえ1年前より現在のほうが、時間の経過が加速度的に速  
まっているような気がする。何かに対して即座に反応したり返答す  
ることへの要請が、よりいっそう強制的、もっといえば強迫的な  
ようになってきているように思えてならないのである。

こうした変化のすべてが現在の技術革新によってもたらされたな  
どと短絡的なことを言うつもりはない。けれども瞬時に情報を伝える  
SNSの圧倒的な情報伝達速度や、グローバルに横溢するインタ  
ーネットの過剰な情報量が、いったん立ち止まって真偽のほどを確  
かめたり、情報の出所を疑ったり、逆の見方や反対意見に耳を傾け  
るための、時間的な余白や精神的な余裕をわたしたちから奪ってい  
るように見えるのは、あながち錯覚ではないだろう。

すさまじい量の情報が、瞬時に直前の情報を上書きし書き換えて  
いくとき、そしてその速度に合わせて反応することが至上命令にな  
るとき、白か黒か、善か悪か、敵か味方か、損か得かといったわか  
りやすい判断基準は、わたしたちに安心感と満足感をもたらしてく  
れる。シンプルでわかりやすい基準に当てはめてサクサク片付けて  
いけば、難しいことを考える必要もなく、効率は良くなり、快適な  
動作が可能になり、処理能力の速度はアップして、経済効果も高ま  
るというものだ。

速度、効率、経済効果、コストパフォーマンス。わかりやすいこ  
と、シンプルであること、咀嚼せずとも誰でも簡単に飲み込み消化  
できるものであること。社会的諸現象や文化的な諸事象を、口当た  
りのいいビタミン入りゼリーもどきの「情報」にして流し込むこと  
ができるよう加工すること。こうした加工技術の開発の波は、いま  
や人文諸学の隅々にまで広がっているように思われる。その結果、  
いよいよわたしたちは知的な咀嚼能力を喪失しつつあるようにみえ  
る。粘り強く思考したり、慎重な議論を重ねることなど、時間の浪

費というだけでなく、時代遅れのアナクロニズムとして、日々の生活の隅っこのほうに押しやられ、埃をかぶってしまうのである。

だからこそ、と、ここにきておもわず教養主義的な凡庸さをさらけ出してしまふわけだが、SNSやインターネットを騒がす時事問題や三面記事ネタ、最近の社会調査の動向、新刊小説や新作映画、有名な賞を受賞するのしないのといったお祭り騒ぎからは距離をおいたところで、あらためて本を読みたいと切実に思う。それできれば古典や古典を本格的に扱った書物をじっくり読みたい。最近とみにそう思う。

「時事問題の騒音をBGMにしてしまうのが古典である。同時に、このBGMの喧噪はあくまでも必要なのだ」と述べたのはイタロ・カルヴィーノであった。

めまぐるしい情勢変化や、社会の根源的な変質、身に迫り来る腐蝕の感覚といったものは、古典とは無縁のものに見えるかもしれない。だがそれはまったくの誤解である。古典を読むためには、社会を濁流のように流れる時事的な情報はBGMとして必要なのだ。もしかしたらBGMが喧しいほど、古典を深読みするチャンスかもしれないのである。

今年度着任された菅野聡美先生は、それをあらためて目に鮮やかに示してくれた。江戸末期から昭和にかけて書かれた複数領域にわたる膨大な数のテキストを渉猟し、そこからテキストと同時代の〈性〉をめぐる言説の政治性を明らかにすることによって、いまのわたしたちの社会を捕縛している政治的力学に達する読みを可能にする。豪快なその解析ぶりには、古典が奏でる旋律と時事的な通奏低音の見事な絡まり合いが表現されている。

昨年度から助教として教鞭をとっておられる福嶋亮大先生の近著『厄介な遺産』もまた、古典が奏でる主旋律への大胆な斬り込みと繊細な分析の手さばきによって、目の覚めるようなサウンドスケープを拓いてくれる。前著『復興文化論』が「無常観」偏重の従来型の日本文化論を根本から批判したことは記憶に新しいが、このたびの著書では、演劇的想像力に取り憑かれた小説家たちという、ジャンル論を超え出るような視角が喚起され、オルタナティブな文学史が描き出されている。そして瀧澤馬琴に影響していたはずの「東洋

的近代」のモダニズムが、日本文学史にとってのミッシングリンクとして指摘されるのである。

こうした斬新な角度からの日本文化論や日本文学史の語り直しは、日本文学を日本一国や西洋文学とのかかわりのみで捉える伝統的な文学史語りからは生まれてこない。東アジア文学との忘却された関係を掘り起こし、その相互関係のなかに日本文学を位置づけるという、ラディカルな歴史的ヴィジョンの転換を通じてはじめて可能になる。瀧澤馬琴しかり、紫式部しかり。みな東アジア文学とのパラダイグマティックな連関のなかで読み直されることのなかで、あらたな位置づけが与えられうるのである。

福嶋先生の古典読解もまた、社会的諸現象や文化的諸事象が醸す騒々しいBGMから遮断された、真空の実験室でなされているわけではない。わたしたちがそこで耳にするのは、「過去の作品を成長させ、そこに新たな価値を付与し、現代の時代状況にぶつけていくための演奏法」(『厄介な遺産』)によって奏でられた、これまでになく新鮮な旋律であり、豊かなノイズによって構成された通奏低音の波間で営まれる〈歴史〉語りであり、その語りが放つ、得がたき解纜の瞬間の空気の震えである。情報社会から隔絶されて儼が生えているかにみえる古典を粘り強く読むことによって、はじめて目の覚めるような同時代批評を奏でることができる。お二人のご研究は、それを見事に示しているのである。

さいごにひとつ、大変嬉しいニュースをお伝えすることで、この拙文を終わりにしたい。来年度からは、これまで助教として御指南願ってきた福嶋先生を、あらためて准教授としてお迎えすることになっている。これ以上ない得がたい布陣が敷かれることになるわけで、今後、比較文明学専攻がどのような展開をみせていくのか、スリリングというほかない。

2017年1月

立教比較文明学会会長

立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻主任

林 みどり